

題目：SNS で“誰と”繋がるべきか—SNS 利用傾向が大学適応に与える影響の縦断分析—

氏名：松原美希

指導教官：結城雅樹

本研究では、新しい環境への移行期にある人々（大学新入生）にとって、ソーシャルネットワークサービス（SNS）を通じてコミュニケーションをとる相手が、主に過去の環境の友人か新規環境の友人かによって、その後の大学適応度ならびに一般的適応度に違いを生むという因果関係の存在を、縦断研究を行うことによって検証する。大西（2013）は SNS を利用する際に、大学入学以前からの既存関係の維持を目的とするか、入学後の新規関係の構築を目的とするかによって、大学への適応度に差が見られるかを検証し、新たな生活環境への適応が阻害される可能性が示された。しかしこの研究には、データ収集が一時点のみで行われた相関研究に留まり、因果関係が検証されていないという問題があった。また、「新規環境への適応」の操作的定義を大学における対人関係の豊かさのみに限定しており、より深い心理的適応への影響までは考慮に入れていなかった。そこで本研究では、1) 時系列データの収集、2) 適応の測定尺度の広範化という二点を改善し、SNS 利用と新入生の大学適応との間の因果関係の検証を行った。時系列データを用いた分析の結果、SNS を既存関係の維持よりも新規関係構築の目的で利用している人ほど、新規環境において友人から受けるソーシャルサポート量が多いとの結果が得られた。心理的適応については、有意な間接効果が得られなかったため、SNS 利用傾向自体の影響を確認することはできなかったものの、友人から受けるソーシャルサポート量が、利用者の心理的適応（居場所感と人生満足度）と正の相関を持つことが明らかとなった。以上の結果は、SNS の利用の仕方が、大学新入生の友人関係に影響を与えることを示していると同時に、またそれが長期的には彼らの心理的適応にも影響を与える可能性を示唆している。本研究には少なくとも以下の 3 つの限界がある。1) データ収集時点間の間隔が約 3 ヶ月しか設けられなかった点、2) SNS 利用傾向の変数を、実際には正の相関関係にある既存関係の維持と新規関係の構築との二項対立として扱った点、3) 対象が大学生に限定されていた点である。対人関係をアシストする新しいツールとしての SNS をどう利用していくべきかという“SNS の正しい使い方”を提示する研究として、これらの問題を解消した研究が今後期待される。